Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P—241　妊娠早期から管理された双胎の絨毛膜別の周産期予後に関する研究

大阪府立母子保健総合医療センター
末原則幸，緒方　功，荻田和秀，早田憲司，
別宮史朗，永田光英，信永敏克，光田信明，
清水郁也

［目的］双胎のうち一絨毛膜二羊膜双胎(以下MD)は二絨毛膜二羊膜双胎(以下DD)に比し，周産期死亡率が高いことが報告されている．しかし，一絨毛膜双胎では異常は発生してから紹介される例も少なくない．そこで妊娠早期から管理された双胎について絨毛膜別に周産期予後を検討した．
［方法］1987年から1995年の9年間に妊娠16週以前から当科で管理した一絨毛膜一羊膜双胎(以下MM)6組，MD72組，DD103組の周産期の死亡と罹病を後方視的に検討した．Discordant twinsとは出生時の体重差が25%以上の場合とした．
［成績］流死産に至ったのはMMで5組，MDで12組，DDで2組であった．Discordant twinsはMDで8例(11.1%)，DDで11例(10.7%)であった．TTTSの発症は5例(6.9%)に見られた．一児子宮内胎児死亡はMDで2例(2.8%)，DDで4例(3.9%)であった．MDの2例の生産児はいずれも新生児死亡になった．早産を妊娠37週未満，妊娠32週未満および妊娠28週未満に分けて絨毛膜別に頻度をみるとMDで22例(30.6%)，3例(4.2%)，1例(1.4%)であったのに対し，DDでは21例(20.4%)，5例（4.9%)，1例(1.0%)であった．新生児死亡はMDでは 5例(3.9%)，DDでは2例(1.0%)であった．生存児で神経学的後障害を有する児はMDで2例(1.6%)，DDでは3例(1.5%)であった．
［結論］100組のMD双胎を妊娠16週以前から管理していたとすると死産児は22人，新生児死亡は7人，神経学的後障害は3人，また100組のDD双胎では死産児は8人，新生児死亡は2人，神経学的後障害は3人となり，DD双胎に比しMD双胎の周産期予後の悪さが確認された．

P—242　妊娠時高血圧、蛋白尿の画像診断からみた解析

浜松医大
徳永直樹、金山尚裕、米澤真澄、山下美和、
杉村基、小林隆夫、寺尾俊彦

［目的］我々は妊娠中毒症の発症要因に妊娠子宮による母体大動脈、腹部交感神経節、左腎静脈の圧迫や過剰刺激が関与していることを、臨床例の検討と動物実験から解析してきた。解剖学的にこの部位に圧迫等の刺激を受けやすい状態が妊娠中毒症の危険因子であると考えられる。一方、妊娠中毒症の発症病態には高血圧優位と蛋白尿優位があることが知られている。妊娠中毒症の高血圧優位型と蛋白尿優位型において母体大動脈、左腎静脈の部位に解剖学的に違いがあるかどうかをMagnetic Resonance Image Angiography (MRA) 、超音波断層法、血管造影を用いて検討したので報告する。［方法］15例の重症妊娠中毒症（日産婦分類）の妊婦を高血圧優位群(H群)、蛋白尿優位群(P群)に分類した。H群(7例)は妊娠中毒症発症時高血圧が認められたもの、すなわち蛋白尿に先立って高血圧が認められたものとした。P群(8例)は発症時蛋白尿が認められたもの、すなわち蛋白尿の方が早期に出現したものとした。それぞれにMRAあるいは超音波断層法を用い、大動脈の走行、腎静脈の拡張度、異常血管の有無について検討した。症例によっては血管造影により確認した。
［成績］H群では画像診断上、大動脈径が有意に大であるものが7例中3例、大動脈の正中偏位が4例、大動脈の蛇行が2例に認められた。P群では画像診断上、左腎静脈の拡張が8例中7例に認められ、左卵巣静脈の拡張が3例、脾静脈より左腎静脈へのシャントが1例、その他の左腎静脈周囲の異常血管(下腸間膜静脈の逆流・拡張、側副血行路)が2例に認められた。［結論］妊娠中毒症の病態形成に腹部交感神経節や左腎静脈と周囲の血管との解剖学的関係が関与していることが示唆された。

NII-Electronic Library Service